

フランツ・布伦ターノにおける超越論的現象学の萌芽

Ein Keim der transzendentalen Phänomenologie bei Franz Brentano

依田 義右・次田 憲和

1 ブレンターノ心理学の「経験的」方法

フランツ・布伦ターノ (1838-1917) は、現象学の完成者フッサールが師として尊敬した哲学者であり、フッサールの使う「現象学」という語も直接には布伦ターノに由来しているばかりか、現象学の術語の内の意外なほど多くが布伦ターノにおいて既に使用されている。「志向性」という概念は、その原型が既にアリストテレスにあり、トマス・アクィナスの哲学においても重要な役割を演じている、優れて古典的な概念であるが、布伦ターノは、現代哲学史のコンテクストの中に「志向性」概念を新たに甦らせた哲学者として広く知られている^①。本小論ではまず、布伦ターノの「経験的empirisch」心理学の特質を、彼の主著と目される1874年公刊の『経験的立場からの心理学』(全三巻)における論述を主に引き合いに出しつつ論じ^②、これをもとに次に、布伦ターノの「記述的deskriptiv」心理学と呼ばれる学が^③、フッサールの超越論的現象学にどのように進化・発展していったのかについて、フッサールの論文を手がかりにして論じる。

布伦ターノは心理学を哲学の基礎と考え、それを伝統的な形而上学的思弁ではなく、自然科学のような「経験的」方法に基づけようとした。この点で布伦ターノの心理学は自然科学を範として構想されたものであったと言える。1874年に最初に出版された『経験的立場からの心理学』(第一巻)でも、布伦ターノは、基本的には心理学に対しても、既に経験科学として確立している自然科学と同質の実証的な方法論を求めていた。それゆえ、この書の第一巻でも「心理学の基礎を成すのは、自然科学と同じく、知覚と経験である」

と明言されることになるのである^④。(Psychologie Bd. I, S.40.)

主著『経験的立場からの心理学』は志向性理論の先駆的著作として知られるが、布伦ターノ哲学は広汎かつ複雑であり、フッサール現象学とも共通する、志向性の理論や内省的な方法論は、布伦ターノ哲学の全体理論と方法の一角を占めるに過ぎない。これは志向性理論を「自然(主義)的」なものから純化したうえで最大限に肥大させた現象学とは違い、布伦ターノの志向性理論や内省的方法はいまだ不徹底であるということも意味する。布伦ターノの立場はあくまで「素朴naiv」で「非純粋」すなわち「自然的natürlich」な「心理学」であって、「厳密streng」かつ超越論的に「純粋rein」な「現象学」ではないゆえに、生理学などの他の自然科学(さらには形而上学も)に依存していることも否定しえない。こうした自然主義的側面を推し進めれば、心理学は自然科学の一種たる実験心理学に近づく^⑤。この種の心理学はヴェントなどに代表されるものであるが、物理的的刺激と感覚の関係に関する法則である有名なウェーバー・フェヒナーの法則などに見られる心理物理学なども基本方向は同一である。(Psychologie Bd.I, S.98f.) これらは人間の心を身体(脳・神経など)との連関において捉え、外的な観察や測定および実験などを方法とする客観科学(経験科学)である。ここでは、とりわけ感覚Empfindungが外的刺激に起因するものとして扱われ、心理現象は一般に有機体内部の物理的出来事に根拠をもつものとされる。(Psychologie Bd.I, S.100.) 一般に心理過程は生理学的過程に依存したものとされることで、心理学が生理学に基礎付けられるが、これをさらに突き詰めると、色

や音などの感覚を分子の振動などとして物理学的・化学的に説明するところまでゆきつく。(Psychologie I, S.66-67.) しかしながら、ブレンターノは心理学の法則を生理学等の法則から導くという方法をとらない。

心理現象を生理学的条件に依存するものと見ることに、ブレンターノ心理学が依然として自然主義的説明を容認していることは事実としても、言うまでもなく、彼の構想する経験的な心理学は、他の自然科学や実験心理学とは区別されるものである。ブレンターノ以後に続くことになる現象学の系譜に位置づけて考えるまでもなく、生理学などにもとづく因果的説明や実験的方法によらず、心を内側から捉えて記述するという方法こそがブレンターノ心理学の眼目と言える。表象や感覚や想像や記憶などの心的状態の実体的な担い手としての「心 Seele」の学が心理学であるとされるが、これは自然科学が物体の法則や固有性についての学であることに対比できる。(Psychologie Bd.I, S.6-8.)だがここで注意すべきは、ブレンターノは「形而上学の探淵」(Psychologie Bd.I, S.29.)には陥らず、「心」そのものではなく「心理現象 psychische Phänomene」に目を向けることである。デカルト、スピノザ、ライプニッツのように強固な形而上学的実在論はブレンターノにおいては打ち立てられず、心も物体もともに単なる「現象」と見なされている。彼の構想する心理学は心的実体というより心理「現象」の学であり、(物理的なものを扱う)自然科学が物理「現象」の学であることに対比できる。それらは「真なる現実的存在者 das wahrhaft und wirklich Seiende」ではないのであるから、我々は感覚に直に示される通りのものを拠り所とするしかないわけである。

(Psychologie Bd.I, S.13.)

2 「物理現象」と「心理現象」の区別について

心理現象の学としてのこうしたブレンターノ心理学の重要な方法的特質は、他の自然科学が「外的経験」

つまり「外的知覚」に依拠するのに対し、「内的経験」「内的知覚」である、ということである^⑥。我々の感覚の原因ともなる外的な実在の在り方が感覚と対応するかどうかは定かではなく、物理現象は相対的な真理しか与えないが、内的知覚によって明証性をともなっているがままに捉えられる自己の心理現象はそれ自身が真実なるものを示すわけだから、これを扱う心理学はある種の優位性を持つことになる。(Psychologie Bd.I, S.28-29.) フッサールにおいてもそうであるが、心理現象とは、不確実な因果推理に頼って外側から説明されるものではなく、内側からありのままに記述されるべきものなのである。また、ブレンターノにおいては、神の存在などの形而上学的問題は、我々が直に直観できる内的経験の範囲を超え出たものであるから、妥当なものとは見なされない^⑦。実験心理学や心理物理学などの客観科学としての心理学は、実験や観察などに基づく帰納に依存するものであり、そのため、外的知覚に依存せざるをえないであろう。これに対し、いわゆる「記述的」心理学とは、我々の内的な経験つまり内的知覚に明証的なものとして直接与えられている心理現象のみを主題化するものであり、後のフッサール現象学と同質の学と言える。ことに第一巻が公刊されたあと長い間隔をおいて1911年に発表された『経験的立場からの心理学(第二巻—心理現象の分類について)』の本論における心理現象の分析内容は、現象学のエポケーと同じく、身体とその心理物理的固有性(身体-物体と心の因果関係)は方法的に捨象され、純粋な志向性理論と言ってもいいほどになっている。ブレンターノ哲学の基礎方法としての心理学は、自然科学と同じく、経験に基づくとは言っても、内的知覚の経験に基づく特有なものであるわけだから、本来(潜在的には)他の心理学や自然科学、そして(それらが明に暗に前提する)形而上学とは、方法的にも分析内容の面でも、全く異質の「新種の」心理学であったわけだ^⑧。

ブレンターノは、『経験的立場からの心理学』(第一巻)の冒頭において、まず現象としての世界全体を物

理現象と心理現象の二つのクラスに分類している。これに応じて、心理現象の学としての心理学は、物理現象としての学たる他の自然科学から区別されることになる。ではこの「物理現象 *physische Phänomene*」とは具体的にいかなるものか。

「それに対して、物理現象の例とは次のようなもの、すなわち、私の見る色、図形、景色、私の聞く和音、私の感じる暖、冷、香、ならびに、空想において私に現象する、同じような形象である。」(Psychologie Bd.I, S.112.)

ここで挙げられている色や図形などの感覚的性質が、他ならぬ物理現象である。そして正常な知覚経験において継起する諸々の物理現象としての世界に関する法則の探求が自然科学を可能ならしめる。当然ながら、物理現象とは我々の外的知覚に与えられるままの存在を指すのであって、我々の心の外に存在する形而上学的実体としての物理的世界ではない。とは言っても、それは空想なのではなく、外官のはたらきを通して我々にありありと現出してきたものである。しかし他面において、超越論的エポケーを遂行しないブレンターノは、時間の流れや空間的延長をもった諸物体（および物体としての身体）を含み、かつ、感覚器官を介して心に因果的に影響を与え感覚（与件）を生じせしめる力をも有する実在的な世界そのものを排除しておらず、また、そうした力についても自然科学が探求する可能性を否定していないようである。ただし、外界の在り方を物理現象が完全に表象することで両者の間に完全な対応関係が形成され、我々が現に経験しているものとしての世界を超えた世界それ自体の正確な知識が与えられるというのではないが。(Psychologie Bd.I, S.28-29,138-140,151.) それでは次に、「心理現象」とは具体的にいかなるものとされているのか、それは以下の説明に明瞭に見て取れる。

「心理現象に対する実例を提供するものは、感覚あるい

は空想によるあらゆる表象である。そしてここで、私が表象ということによって理解しているものは、表象されたものではなく、表象の作用である。それゆえ、音を聞くはたらき、色のついた対象を見るはたらき、暖かいとか冷たいという感覚のはたらき、ならびにこれと類似の空想状態が、私が考えるところの心理現象の実例である。しかし、同じく一般的概念を考えるはたらきも、もしこうした思考のはたらきが別のときに現実に生じるのならば、また心理現象である。さらに、あらゆる判断、あらゆる想起、あらゆる期待、あらゆる推理、あらゆる信念、あるいは、あらゆる思念、あらゆる懐疑、これらは心理現象である。そしてさらに、喜び、悲しみ、恐怖、希望、勇気、弱気、立腹、愛、憎、欲求、意志、意図、驚嘆、感嘆、軽蔑等々のような心情の動きもまた心理現象である。」(Psychologie Bd.I, S.111f.)

これらの一群の心理現象は言うまでもなく「内的知覚の対象」として「直接的な明証性」において捉えられるものだが (Psychologie Bd.I, S.137.)、心理現象のこうした認識論的な定義づけの意義はどこにあるのか。周知のように、デカルトは実体を、精神ないし心と物体に分け、後者の本質を延長に、前者の本質を思考に求め、スピノザは唯一の実体である神の無限の属性のうち我々に知られるものとして思考と延長を挙げた。ブレンターノによる物理現象と心理現象の区別も、こうした物心二元論的な近世哲学史の延長線上にあるように見える⁹⁾。また、ブレンターノの同時代人では、経験論の流れを汲む連合心理学派のイギリスの心理学者アレクサンダー・ベイン Alexander Bain (1818-1903) も、延長の有無によって客観的（外的）世界と主観的な内的経験の世界を区別していた。しかしながら確認すべきは、ブレンターノが心理現象と物理現象の徴表を、延長の有無という存在論的次元に求めてはいないことだ。

なぜなら、まず心理現象は「局所化[lokalisieren]」されて身体や空間中に位置づけられることもあるからである。何よりもアリストテレスによれば、感性的知覚は身体器官の作用である^⑩。また、多くの生理学者や心理学者は、快や痛みや欲求などは、感覚器官や特定の身体部分の中に現れるものとして語るであろうし、こうした類似の例は枚挙に暇がなからう^⑪。一方、「心理現象のみならず多くの物理現象も延長を欠いたまま現象する」(Psychologie Bd.I, S.122.)と言われるように、音や臭いなどの物理現象は延長を欠いているように見える。もしそうであるなら、延長の欠落によって心理現象を定義することはできないことになる。極端な例としては、バークリーによれば色も延長を欠いているのであり、また、プラットナーErnst Platner (1744-1818)によれば触覚もそうである。さらに、ヘルバルト、ロツェ、ハートリー、ブラウン、スペンサー、ミルなど他の論者によれば、他の外感に関しても延長性を認められない。(Psychologie Bd.I, S.120-123.) これに対して、布伦ターノは心理現象の徴表を「延長の有無」ではなく、「知覚の本性の相違」に求めた。すなわち、内なる明証性ととも知覚されるという認識論的な特徴こそが、延長の有無に関する存在論的決定に依存せず、心理現象を特徴付けると、布伦ターノは考える。ただ、(厳密な狭義の意味で)内的かつ明証的に知覚される真の(心理)現象そのものだけを、外的な身体的要素から選り分けて注意深く摘出すれば、空間的延長とは異質なものであることが理解されるのであり、事実、この方向こそが弟子フッサールの歩んだ道であった。

物理的現象についての外的知覚は誤りの可能性に付き纏われ明証的たりえないが、心理現象についての内的知覚は明証的である^⑫。それは我々の内に直接に見出されるものであるから、外的なものについての知覚と異なり現実に存在することが確実なものであるわけである^⑬。(Psychologie Bd.I,S.128,137.) カントは内的知覚(内官)も外的知覚(外官)もともに現象を捉

えるに過ぎないとして(ある意味)軽視したが、布伦ターノはデカルト的懐疑におけるように心理現象の直接的明証性を重視し、かつまた、内的知覚の外的知覚に対する優位性を主張するわけである。この点において、布伦ターノ心理学は現象学の原初形態であることが明瞭に見て取れるのだが、こうした「心理現象」は、「現象」とは言っても、単なる「物理現象」とは違い、一見奇妙な術語とも思われるが、「現実的実在性 wirkliche Existenz」をも有しているとされる^⑭。『経験的立場からの心理学』第一巻で、布伦ターノは以下のように明確に述べている。(以下の引用文における「志向的」という概念については次章で解説する。)

「(他の現象とは異なり)心理現象だけには、志向的実在性のみならず、現実的実在性もまた帰属する。心理現象とはそのような現象でもあると我々は言うことができる^⑮。」[引用文中の括弧内の語は筆者による補足](Psychologie I, S.129.)「心理現象には志向的実在性以外に現実的実在性も帰属する。心理現象とはそうした唯一の現象である。」(Psychologie Bd.I, S.137.)

物理現象について布伦ターノは「我々が物理現象と名づけるような現象には、いかなる現実も対応しえない」(Psychologie Bd.I,S.129.)と言っているが、外的世界についての情報を正確に与えるものか否かについてまったく不確実な外的知覚と異なり、内的知覚においては、表象内容が、現実に我々のうちにあるものとして、ある種の(認識論的な意味の)「実在性 Existenz」を伴って、遺漏なく確実に把握される。心理現象のみが有するとされる「現実的実在性」にはこうした含意があるものと考えられる。もちろん、これは外界の物理的実体の有する形而上学的な「実在性 Realität」とは異なるものであり、内的知覚の対象たる心理現象が直接的な明証性ととも(フッサールの術語で言えば)「十全的 adäquat」に認識されるという事態を表している。まさにそうした際立った認識論

的特徴のみが、心理現象のまぎれもない存在性を保証するものと思われる。(Psychologie Bd.I, S.137.)

3 ブレンターノによる「志向性」概念の定式化

心理現象と物理現象の相違についてさらに重要なことは、後者は前者と対等なものとして独立して存在しているのではなく、あくまで心理現象の「対象」つまり「内容Inhalt」として存在しているに過ぎない、ということである^⑥。(PsychologieBd.I, S.140.) こうしたブレンターノの立場は、近世哲学史で言えば、バークリーやヒュームなどの現象主義（主観的観念論）に極めて近いと言えるが、ヒュームが「知覚」や「観念」という概念に着目しながらもついに明確化しえなかつた心理現象の特質に彼は注目した。それが「志向性」というきわめて古典的な概念であったのであり、ブレンターノはこれこそが物理現象から画然と区別されるべき心理現象の本質的特徴であると考えたのである。すなわち、「認識、喜び、欲求は現実的に存するが、色、音、暖は、単に現象的であり、志向的であるに過ぎない」(Psychologie Bd.I, S.129.) と述べられていることから分かるように、物理現象の有する「現象的 phänomenal」な存在性格は、「志向的intentional」という周知の概念で捉え返される。物理現象は心理現象と比べて非明証的である上に、高々その内容として存在するに過ぎないということを考えれば、物理現象の有する前出の「志向的実在性」とは、デカルトの「表象的実在性」と同じく、心理現象という枠の中でのみ有効な、限られた（弱い）実在性を意味するもののように思われる^⑦。

ブレンターノは、1874年の『経験的立場からの心理学』（第一巻）において、志向性とはいかなるものかについて、それほど多く述べていない。また、1911年に公刊された大部の第二巻では、心理現象の有する志向

性の本質ではなく、その分類に多くの紙数が割かれているにすぎない。ともあれ、『経験的立場からの心理学』における最も有名な箇所を引用して志向性の特質について見ておく。

「全ての心理現象は、中世のスコラ哲学者らが、対象の志向的（または心的 mental）内存在 Inexistenz と名付けたもの、そして、まったく曖昧でない表現というわけではないが、我々が内容 Inhalt への関係、客観への方向（ここで言う客観というのは実在性 Realität の意味に解すべきではない）、あるいは内在的对象性と名付けるところのものによって特色付けられる。全ての心理現象は、その各々が同じ仕方ではないとしても、対象として何かあるものを内に含む。表象においては何か表象され、判断においては何か承認されるか否認されるかいずれかであり、愛においては何か愛され、憎しみにおいては何か憎まれ、欲求においては何か欲せられる。こうした志向的内在は心理現象にもっぱら固有である。物理現象はこれに類似したものを示さない。それゆえ我々は、心理現象とは志向的に対象を自己の内に含む現象であるということによって、心理現象を定義しうるのである。」(Psychologie Bd.I,S.124f.)

この引用の中に驚くほどの高密度で凝縮されていることは、三つの要件に分析できる。これらの三つの要件はどれも現象学の志向性理論の核を成す要件と言ってよい。まず、(1) 全ての心理現象は「対象の志向的内在」「内容への関係」「客観への方向」「内在的对象性」などというものによって特徴付けられる、ということに注目しよう。後のフッサールにおいてより明確に強調されるようになる論点であるが、志向的關係とは本質的に実在世界の中の因果關係として説明しえない独特の關係であり、また、志向的对象が意識に含まれる（内在する）仕方も、器の中に物体があるというような空間的包含關係ではない特有の關係である。こ

うした志向性（志向的内在）の比類なき特有性についての詳しい説明はないが、ブレンターノにおいて、物理現象は心理現象（志向性の作用）が向かうその対象（客観）となるものであり、心理現象の内容としてそのうちに内在すると考えられている点は、現象学と何ら変わりはない。この限りにおいて、『経験的立場からの心理学』では早くも、フッサール現象学の「作用/内容」の相関構造（ノエシス・ノエマ構造）が半ば確立していると言える。（Psychologie Bd. I, S.111,239.）純粹現象学では、「現象」つまり「現出」というものは、「現出するもの（ノエマ）」と「現出するはたらき（ノエシス）」に明確に分けられる。大まかに言って、ブレンターノの言う物理現象はノエマに組み入れられるもの（の一部）に対応し、心理現象はノエシスに属するもの（の一部）に相当する。1901年に第一版が公刊された『論理学研究』「第五研究」などで説かれているように、フッサールは「表象」概念は極めて多義的なために避けることも多いが、先立つブレンターノもまた、「表象」には「表象作用」と「表象されたもの」という二義性が存することを見抜いていた。（Psychologie Bd. I, S.111,250.）

前掲の有名な引用文では次に、(2)全ての心理現象に志向的に含まれているとされる「対象」「内容」とは、「実在性」を含意するものではない、すなわち「非実在的 nichtreal」なものである、という論点も注記されている。志向的对象が実在性を含意しないということは、我々の意識の中においては、眼前にありありと現れ出ている机や樹などの知覚対象も、半人半馬の怪物など現実世界には存在しない想像上の対象も、その客観的実在性の有無あるいはその程度とかかわりなく、対等に扱われるということを意味する、と見てよからう。志向性の立場では、全ての存在者を、実在世界におけるその存在論的身分にかかわりなく、意識の座標平面に現れてきた在り方においてのみ主題化するからである。となれば、先の「志向的実在性」とは、前記のような、心理現象の有する（認識論的な意味での）現実

的実在性 Existenz と比べて、さらにまた、机や樹などの、外界の物それ自体のもつ現実的実在性（すなわち、存在論的意味における客観性ないしは客観的実在性 Realität）と比べて、限られた（弱い）実在性を含意するというよりは、これらの厳密な意味での（強い）実在性は決して含意しえないという点において、端的に「非実在性」と等価である、と言った方が妥当なのかもしれない^⑧。（この（2）に関連する論点については後の章で論ずる。）前掲の引用部分では最後に、(3)志向性を特質とする心理現象には「表象/判断/愛憎」などの様態があるということが語られている。

これらの内の最初の二つの問題は、本章と前章で論じた、ブレンターノの経験的心理学の特質や心理現象と物理現象の区別の問題などにつながり、フッサール現象学において洗練されてゆくことになる重要かつ広範な論点である。次章では、最後の三番目の要件について『経験的立場からの心理学』第二巻の「心理現象の分類について」（初版1911年）をもとにしてやや詳しくブレンターノの議論を概観する。「記述的心理学」として明確に自覚され、フッサール現象学につながってゆくことになる、反省的で内的な心理学の内実をなすものは、他ならぬこの第二巻における、心理現象ないし志向性の諸類型についての論述なのである。ここでの諸説明を追跡することによって、ブレンターノの説く「経験的」心理学と言われる学の具体的な姿が見えてくるものと思われる。

4 「心理現象」の分類の背景

ブレンターノの確信するところによれば、心理現象の内容すなわち志向的-内在的对象の関係様式にはいくつかの基本的種類がある。この議論をもっとも簡潔にまとめるならば、心理現象は①「表象 Vorstellung」②「判断 Urteil」③「感情 Gefühl（心情）や意志などその他のもの」の三つの範疇に分かれ、そのうち「表象」が基礎となり、これなしには他のものは存立し得ない

ということになる。意志が感情と統合され、表象から判断が分離されていることなど、この分類は伝統的な精神や心の分類と異なるものである。

まず、プラトンは心理現象を、欲求的部分・情緒的部分・理性的部分の三つに分けた。後のアリストテレスは心理現象を、①栄養摂取・成長・子孫の産出という植物的部分、②感覚・空想・情緒といった感性的部分、③高度な思考・意志という知性的部分の三つに分けている。心理的活動のうちで、①は植物を含む生物全般に備わり、②は動物という種に、③はこの世の存在ではもっぱら人間にのみ特有としている。

(Psychologie Bd. II, S.4-7,27,30.)しかし厳密には、第一の植物的部分は心理現象には含まれないため、アリストテレスでは、心理現象は二つに区分されていることになる。アリストテレスは他方で、心理現象を欲求と思考という二つのものに区分してもいる。布伦ターノによれば、後の方の分類は、志向的内在の様式、あるいは内在的対象性への関係様式に着目したものであり、高く評価される。思考も欲求も同一の客観に向かうが、関係の仕方が異なるのである。同一の対象がまず思考能力に取り込まれ、そうして欲求が作動するようになると、アリストテレスは見るのであり、前者に属する表象が後者の必然的な先行条件となる。

さらに近代になると、ドイツの哲学者テーテンス(1736-1807)は、従来のアリストテレスやヴォルフの二分法を改めて感情という独立した能力を新たに加え、感情・悟性・活動力Tätigkeitskraft(意志)の三つの根本能力を最初に確立した⁹⁾。同じドイツの啓蒙思想家メンデルスゾーン(1729-1786)は、認識能力・快や不快を感じる感覚(是認)能力・欲求能力の三種に分けた。テーテンスらの影響下にカントは、周知のごとく、心の能力を①認識能力Erkenntnisvermögen②快と不快の感情Gefühl③欲求能力Begehrungsvermögen、という相互に導出不可能の三基本類に区分した。カントにおいては、欲求は客観を実現しようとする努力であり、認識は客観を把握し評価するが、感情は客観には

関係せず主観にのみ関係するとされる。(Psychologie Bd.I, S.10-11.) また、布伦ターノの見るところ、デカルト、ライプニッツ、スピノザ、ヴォルフなどは、表象能力すなわち認識能力は、そこから他の能力が導き出される根本能力と考えた。イギリスの哲学者ハミルトン(1788-1856)は、感情や欲求には認識能力のうちにはない性質が付け加わるとしてこれを批判する。とはいえ、彼においてもやはり認識能力は第一のもので、感情や意志という他の能力の不可欠の条件である。快苦の感情や欲求や意欲なくして或るものを存在するものとして認識し思考することはできるが、逆に、感情や欲求を持ちながら何らかの客観の認識をもたずそれを意識しないということはない。さらに、ドイツの哲学者ロツェ(1817-1881)もカントの路線を受け継ぎ、表象と感情と意志を意識の基本要素とした。さらにまた、アレクサンダー・ベイン(1818-1903)は、思考(知性つまり認知)、感情、意志(意欲)の三分法を採用している。

布伦ターノは以上のようなプラトンやアリストテレス以来の伝統的な心理現象の類型化を半ば評価しつつも不十分と批判する。それでは、「心理現象の分類について」における布伦ターノ自身による心理現象の分類とはどのようなものか、その三分類を簡単にまとめてみよう。

5 「表象」・「判断」・「心情」の三類型の特徴

①表象：ある色を見たり、ある音を聞いたり、ある像を空想したりするときに、我々に現象するところの基本要素。これなしに意識がその対象に志向的に関係することはできないゆえに、判断や感情や意志(意欲)など他の心理現象の根底を成すとされる。したがって、表象なくして判断や愛憎や意志などは存立不可能であるが、後二者なくしても前者の表象は存立可能である。また、表象の段階ではまだ、認識と誤謬、すなわち真

と偽を問うことはできない。例えば、「石」というものも表象の一種であるが、これが「石がある」となると、次に述べる「判断」となり、真偽が問えるようになる。

②判断：「真」として「承認annehmen」する、あるいは「偽」として「拒絶verwerfen」すること。すなわち、上記の「単なる表象」に肯定とか否定の働きが新しく付け加わったものであり、特有の総合作用だと言える。判断と表象は対象に対する異なる関係の様式であるゆえ、表象においても判断（肯定・否定）においても、同一の対象が心理現象の内容となることもありうる。注目すべきは、先に見た伝統的な分類で一括して「思考」「認識」などと呼ばれていたものが、ブレンターノでは表象と判断に二分されていることである。真として何かあるものの存在を承認することや、偽としての何かあるものの存在を拒絶することは、単なる「表象」とは異なる独特の、しかも高次の心の作用である。それゆえ、例えば「石」という表象に他の表象をいくらつなぎ合わせて表象の複合体をつくっても、それだけで「石がある」という「判断」にはなりえない^⑩。なお、次に述べる愛憎なくしても判断は形成しうるが、根底となる表象なくして判断は形成しえない。

③愛憎の感情（心情）、意志、その他：実はこれについては適当な統一的名称がないのだが、内容（対象）に対する、前記の二つとは異なる関係の様式。愛、憎しみ、怒り、不安、歓喜、悲哀、恐怖、憧憬、同情、感謝、嫉妬、後悔などの感情、そして、欲求、意志、努力、希望、勇気、要求、逃避、願望、決心、意図、関心など。これらは対象を善きもの（価値あるもの）ないしは悪きもの（不価値）として見なし、あるいはさらに、それを実現（回避）しようとする働きである。なお、これは認識だけでなく感情や欲求や意志など多様な心の能力を含意するカントの心情 Gemüt 概念と異なる。上の二つの含まれないもの全部、また、伝統的な分類で、意志と感情に分割されていたものは、ブレンターノではここに全て包括さ

れる^⑪。「心理現象の分類について」でブレンターノは、多くの例を挙げながら、感情と意志は中間項が無数にあり連続的につながったものだから、一線を引いて決定的に区別できないことを説明している。表象と判断の関係は前者が後者の基礎となるというものだが、判断も愛憎の基礎となるとブレンターノは見ているようである^⑫。

以上のようにブレンターノは、哲学史を振り返り批判しつつ、認識・意志・感情およびそれに対応した真・善・美という伝統的な三組を、表象・判断・愛憎の三組へと再編してゆく。しかも、表象は判断・感情と意志という他の心理現象を「基づける fundieren（基礎付ける）」という役割があるとされている点が注目される。この章では、こうした志向性（心理現象）の分類が、フッサールにどのように継承されて行ったかを簡単に述べておく。

『イデー』におけるフッサールの志向性の分析は、ブレンターノのそれよりも遥かに体系的で緻密である。心理現象についての素朴な志向性理論は、前に触れた「ノエシス-ノエマ」理論も、つまり「意味」や「構成」についての壮大な理論の中へ組み込まれ進化した。これについて逐一解説する余裕はないが、『イデー』の論述を概観して、フッサールの志向性の分類に関してまず気がつくことは、それが古典的な認識（思考）・意志・感情（心情）という分類法に逆戻りしたように思われるということである。『イデー』におけるフッサールの術語で言うところの「意志」や「心情」など他の高次の志向性（志向的体験）を基づける役割を果たすものは、広義の存在定立（設定立 Position）作用を有し「信念 Glaube」「臆見 Doxa」と呼ばれる志向的体験の基本型である。これは元来の語義では、おそらく「認識」「思考」などと言われるものに（部分的に）相当する、あるいはそれに近いものである。この広い意味で「表象」概念を理解するとすれば、フッサールでも、表象が心情や意志の志向性を「基づけている」、と言えるように

も思われる。また実際、フッサールでもこうした「表象」の用法は誤りというわけではない。他にもないこの意味の表象のはたらきこそが、何かの対象を存在するものとして志向的に「客観化」するのであり、こうした存在定立の作用なくして心情や意志は単なる主観的な体験内容にとどまる。表象作用の本来有する客観化の機能なしに心情や意志が志向性という特性を纏って対象へと関係してゆくことはできないとされる。

フッサールは1911年に公刊された『論理学研究』「第五研究」で「表象」概念はあまりにも多義的であるとしており、この概念を扱うとき我々は常に注意を要する^⑧。よく考察すると、ブレンターノの「表象」概念が、対象の存在について真（偽）として肯定（否定）する以前の単純な事象を指しているのに対し、フッサールの志向的对象とは、心情や意志を基づける信念の段階において既に、「机」や「石」などの単なる対象（事象）つまりブレンターノにおける「表象」だけを含意するのではなく、「aはbである」という事態や諸種の関係（aかつb、aまたはb、など）、そして個体のみならず普遍的对象なども含む、極めて複雑なものとして想定されている。さらにフッサールでは、こうした多様な志向的对象性が、信念上の「確信（確実なものとして現実に存在する）」という根元的信念のもとにおいてだけではなく、推測や疑問など様々な様相を伴って、またこれに加えて、ブレンターノの言うような真としての承認や偽としての拒否とともに、構成されると考えられている。そう考えると、フッサールの「表象」概念は、少なくともブレンターノの「表象」と「判断」両方を含みかつ超える、相当広範な概念であると言える。となれば、表象が心情や意志を基づけるという上の議論は、ブレンターノの用語に即せば、「表象」と「判断」の二者が「心情」「意志」など他のものを基づけている、と言い換えた方がより正確であることになろう^⑨。

6 「心理現象」から「純粹現象」へ

さて、ブレンターノが志向性の立場（対象を非実在的なものとする理論）を離れ実在論的傾向を強めていたころ、フッサールは志向性の立場を進展させ超越論的観念論の立場を確立してゆくことになる。我々はこの最後の章において、ブレンターノのいまだ素朴な志向性理論がフッサールにどのように継承され展開していったか——これは本小論の第3章で述べた（2）の要件にかかわる——について簡潔に述べてみたい。これを論じるために、本論では成熟したフッサール現象学の方法と理論が体系的に論じられた『イデーエン』などのよく知られた大著ではなく、『論理学研究』（第二版）の付録論文「内的知覚と外的知覚——心理現象と物理現象」という論文を参照したい^⑩。フッサールは実は著作や論文の中でブレンターノについては多く言及してはいないのだが、ここにはブレンターノとフッサールの立場の相違の本質が凝縮されているため、この論文は極めて貴重なものと言える。ここにおいて、「内的知覚」「心理現象」「物理現象」「志向性」などということが、ブレンターノにおけるよりも遙かに徹底した観念論的解釈を受ける。彼は次のように述べる。

「それと同時に、心理学と自然科学にとって次のような目的が達成されたように思われる。すなわち、形而上学に拘束されないで定義するという目的、つまり誤って超越的世界の所与性と思念されたものに定位するのではなく、現象という真の所与性に定位して定義をするという目的が、達成されたように思われる。物理現象は今や物体が感覚器官を介して我々の心に与えるはたらきに起因する現出とは定義されず、心理現象も我々の心の活動の知覚のうちに我々が見出す現出ともはや定義されない。どちらの場合も今や、我々が体験しているままの *so wie* 現象の記述的性格そのみが基準となる。」（*Husserliana*, Bd.XIX/2, S.756f.）

この引用では次の二つの重要な論点が提示されている。①超越的な（純粹意識を超えた）実在世界そのものを素朴に想定し、外界の物理的実在が身体（感覚器

官)に因果的に刺激を与えた結果として我々の内に感覚と伴が生じるというような、典型的な形而上学的先人見がまずは排除されるべきであること。(前掲の引用文中の形而上学的先人見とは、現象の因果的説明であるから、「形而上学的自然主義」と呼べるかもしれない。)そして、②「心理現象」「物理現象」「内的知覚」などというものについて、我々のありのままの体験に立ち返った再定義が純粋現象学では行われなければならない。すなわち、外的実在と現象(感覚と伴)を因果推論によって結び付けて説明することではなく、我々に直に体験されているままの現象の諸性格を内側から記述・分析することが重要である、ということである。(布伦ターノ心理学はこれらの点に関して不完全であった。)こうした脱形而上学的な再定義を施すことによって初めて、真正なる意味の心理学や自然科学が可能となる。これらの論点についての若干具体的な議論が、この引用の後のある箇所に見出される。

「それに対して、内的知覚と外的知覚は、これらの術語が自然に理解されている限り、まったく同じ認識論的性格をもつものと、私にはどうしても思われる。(中略)それに、心理状態の知覚の大半は、身体の一部に局所化されているのであるから、明証的でありえないのは明白である。「不安が私の喉を締め付ける」「歯がずきずき刺すように痛む」「心配に苛まれ胸が苦しい」などのことを、「風が木を揺さぶる」「この箱は正方形で茶色だ」などのこととまったく同じ意味で私は知覚する。もちろんこれらにおいて、外的知覚と一緒に内的知覚も存在している。しかしこのことは、知覚された心理現象はそれらが現に知覚されているとおりに存在しているのではない、ということを示唆する。心理現象も超越的に知覚されうるということは明らかではなかろうか。詳細に吟味してみると分かることだが、自然的ならびに経験科学的態度で把握される全ての心理現象は超越的に統覚されているのである。純粋な体験所与性は超越的措定を一切禁止する純粋現

象学的態度を前提しているのである。」

(Husserliana, Bd.XIX/2, S.760f.)

布伦ターノの経験的心理学と純粋現象学の差異を考える上でここはきわめて重要である。心理現象についての「内的知覚」は、もしその心理現象が身体に局所化されているならば、明証的なものでも確実なものでもなく、物理的事物についての「外的知覚」と本質的に変わらない²⁰。フッサールによると、身体は世界(空間延長をもった客観的世界)の内に存在する「実在 Realität」の一種であり、真に内在的な「純粋」なる自我にとっては依然として「超越的 transzendent」なものだからである。「不安」や「心配」の感情が「喉」や「胸」という身体部位に結び付けられて統覚されている限り、それらの知覚は、たとえ「内的知覚」と呼ばれるとしても、目の前にある机や窓から見える樹木などの「外的知覚」と基本的に変わず、明証性の程度が低い「不十全 indäquat」なる知覚にすぎない、というのがフッサールの論点である。布伦ターノの言う「心理現象」の内的知覚とは、超越的なものとして統覚された身体(心理過程のみならず物理・生理的過程も有する有機体)の内に局所化された心的なものの知覚であって、「純粋」現象(意識/志向性)についての真に内的な知覚ではない。「動物の心的生についての客観科学としての心理学において、心理現象の知覚すなわち内的知覚ということで我々が理解しているものが、知覚する者が自分自身の体験すなわちこの人間自身の体験として統握する、自己自身の諸体験の知覚のことであるとすれば、全ての内的知覚も外的知覚と同様、超越的に統覚する知覚である」(Husserliana Bd.XIX/2, S.772.) ということからも分かるように、布伦ターノ心理学における「内的知覚」は、人間や動物(空間時間性という形式をもつ現実的世界の一部としての心身の統一体)の心という超越的実在についての知覚であるため、「外的知覚」と同じく、真に明証的(十全的かつ内的-内在的)な知覚ではないわけである。

7 経験的心理学の「純粋現象学」への進化

『現象学の理念』や『イデー』では、(心理)現象や志向性などというものが、一切の「実在性 *Realität*」をまじえない「純粋 *rein*」なものであることがさらに重視される。布伦ターノでもスコラ哲学でも、基本的に志向的对象とは実在性を含意しない非実在的なもので、心の中にその内容として内在するものであると自覚されていたが、フッサールではこれからさらに進んで、志向的对象を自己のうちに担う現象(志向性/意識)そのものが、実在世界の一部ではない「非実在的 *irreal*」すなわち「純粋」なものとしてされることで、新たな積極的存在性格を帯びる^②。フッサール現象学から見れば、布伦ターノの志向性理論は未だ、(身体過程を介して心の中に感覚を引き起こす外的原因ともなる)超越的世界の存在を仮定しており、形而上学的先人見の残滓に囚われていた。布伦ターノの志向性理論は自然科学(経験科学)の一種たる経験的心理学の一部に据え置かれていたが、これは無自覚に前提された超越的世界(自然的世界)を基盤としてのみ成り立ちえたものであった。これに対し、フッサールは自らの学を、実験心理学や生理学などの客観的な経験科学や形而上学は言うに及ばず、心理現象についての記述的心理学(経験的心理学)とも厳格に区別したかたちで、純粋かつ「超越論的」な現象学とする。実在世界(客観世界)に属するものとして超越的に統覚された人間の心的生(心理現象)についての経験科学が心理学なのに対し、純粋現象学とは、物理的世界や人間の心、そしてまた、物理現象のみならず心理現象なども、要するに、実在世界の内なる実在的存在者一般、を排除するところに成り立つ。超越的実在一般の定立を完全に停止して、真に内在的で明証的、そして非実在的な純粋現象(純粋意識)を明るみにもたらす操作が他ならぬ現象学的エポケーである。布伦ターノにおいて経験的心理学として芽生えた志向性理論は、他のあらゆる自然的学とは区別される特異な学へと進化を遂げていったのである^③。

① H.スピーゲルバーク著、『現象学運動』上巻(世界書院、2000年)の第一章(105,121,122頁他)によれば、布伦ターノにおける「志向性」概念と、トマスのそれとの間には大きな落差があり、両者を安易に重ね合わせるの危険である。トマスにおける「*intentio*」とは、知識を獲得する過程で心の内部に形成される特別な似像ないしは類似体のことであり、外界からの一種の蒸留物を意味していた。これは知覚とは対象の形相を質料なしに受け取ることであり、というアリストテレスの知覚理論に由来する心像説と結びついている。

② これは当初、全四巻の著作として構想されたようであるが、生前には二巻のみが公刊された。後になって遺稿をまとめたものが第三巻として出版されている。筆者が使用した版は、オスカー・クラウスなどにより編集され、遺稿などが付録として付けられている以下のものである。

Franz Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*. Mit Einleitung, Anerkennung und Register herausgegeben von Oskar Kraus. Erster Band. Philosophische Bibliothek Band 192. Unveränderter Ausdruck 1973 der Ausgabe von 1924. Felix Meiner Verlag, Hamburg.

Franz Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*. Mit Einleitung, Anerkennung und Register herausgegeben von Oskar Kraus. Zweiter Band. Von der Klassifikation der psychischen Phänomene. Mit neuen Abhandlungen aus dem Nachlass. Der Philosophische Bibliothek Band 193. Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1925. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1959.

Franz Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*. Dritter Band. Vom sinnlichen und noetischen Bewusstsein-Äussere und innere Wahrnehmung, Begriffe. Mit Anerkennung herausgegeben von Oskar Kraus. Neu eingeleitet und revidiert von Franziska Mayer-Hillebrand. Philosophische Bibliothek Band 207. Zweite Auflage 1968. Unveränderter Nachdruck 1974. Die erste Auflage erschien 1928 unter dem Titel "Vom sinnlichen und noetischen Bewusstsein". Felix Meiner, Hamburg.

本論文中においてこれらの著作は、*Psychologie* と略記し、その参照箇所については、ローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を表す。

③ 『経験的立場からの心理学』が最初に出版された当時は、「記述的心理学」という概念は術語としては定式化されていなかったようである。しかし、筆者の知る範囲では、『記述的心理学』に収められた1888/89年の講義録では既に確固たる術語として使用されており、その概念が五つの要件に簡潔にまとめられている。そして、それらの要件は基本的に『経験的立場からの心理学』(第一巻)の立場を踏襲するものである。これについては以下を参照せよ。

Franz Brentano, *Deskriptive Psychologie*. Aus dem Nachlass herausgegeben und eingeleitet von Roderick Chisolm und Wilhelm Baumgartner. Philosophische Bibliothek Band 349. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1982. S.129.

④ 『経験的立場からの心理学』の第二巻は1911年に、「心理現象の分類について」という題で付録論文とともに最初に出版された。死後公刊された書簡集『非實在的なものからの転向』とともに、この書の付録諸論文は前期の志向的内在論の立場から實在論的立場に転向したと見られるブレンターノの思想を表している。「心理現象の分類について」の序文で「心理現象はそのつど實在的なもの以外のものを客観としてもちうるという見解を私はもはや抱いていない」と述べている。

(Psychologie Bd. II, S.2.) ブレンターノは實在論的傾向を強めてゆくに伴い「志向性」という概念から遠ざかるが、それについては次の文献を参照。

Franz Brentano, *Die Abkehr vom Nichtrealen*. Briefe und Abhandlungen aus dem Nachlass, mit einer Einleitung herausgegeben von Franziska Mayer-Hillebrand. Philosophische Bibliothek Band 314. 1966 Erste Auflage, erschienen im A. Francke Verlag, Bern; 1977 Titelaufgabe in die Philosophische Bibliothek als Band 314. Felix Meiner Verlag.

⑤ ブレンターノは例えば「全てではないが、心理学のきわめて多くの部分は心理物理的性格をなかば含んでいる」(Psychologie Bd.I, S.67)、「脳過程は(中略)心理現象に本質的に影響を与えるものであり、これをともに条件付けている」(Psychologie Bd.I, S.89)と述べている。ブレンターノは、生理学的(物理-化学的)過程が心理現象に影響を与えることを容認しており、したがってまた、外界の事物が感覚器官に刺激を与えそれが神経系に伝達され云々というような知覚経験についての周知の因果的説明、感覚を含め心理的なものは総じて有機体の身体内部に局所化されているという自然主義的な事実なども否定していないように思われる。ブレンターノは心理学を生理学の上に完全に基礎付けることを意図してはいないが、心理学も完全ではなく、脳過程などについての生理学的な知見も必要であることを認めている。MaudsleyやHorwiczなどの批判に見られるように、ブレンターノは、感覚の多様性や心理過程に関する法則を生理学(さらには物理や化学)の仮説によってことごとく導き出し、心理学を生理学的なものなどに解消してしまうことには批判的であるが、心理的な出来事が生理学によって説明される可能性の存在まで完全に否定してはいないようである。したがって、ウェーバーやフェヒナーによる感覚の強度と物理的刺激の相関関係の研究に見られる心理物理的な測定や実験心理学的な方法なども、困難と限界があるものの、単に無意味なものとして退けられているのではない。(Psychologie Bd.I, S.65-67, 70-75,80, 89-93, 100-102, 138-139.)また、第二巻の心理現象の分類の考察に際してブレンターノがしばしば引き合いに出す、イギリスの心理学者A.ペインもまた、心理現象(意志)の特質を生理学的(心理物理的)な条件に依存させているが、心理学的なものを生理学的なものから完璧に分離する心理学者は、あるいは皆無なのかもしれない。両者の徹底的な分離こそが、フッサール現象学を生み出したと見ねばならないのだが、この

ことから我々は現象学がいかに特異な学か理解できよう。

- ⑥ 『経験的立場からの心理学』(第一巻)において早くもブレンターノは、他者の心理現象を内的知覚により直接に把握することの不可能性を指摘している。もっとも、他者の心的生つまり心理現象は表現(発言)を介して間接的に認識できるとも考えている。また、ライブニッツを引き合いに出しつつ、「支配的モナドである私の自我を超えたところには私の内的知覚は及ばない」として、内的知覚の限界を示唆しているところもある。周知のように、心理学が現象学へと超越論的に純化されてゆくにつれ、この点がアポリアとして浮かび上がる。(Psychologie Bd.I, S.53,61,233.)
- ⑦ この点に関して一例を挙げれば、ブレンターノはトマス・アクィナスら中世スコラ哲学の形而上学思想を優れたものと認めつつも、「高空飛行的思弁 hochfliegende Spekulationen」として批判する。(Psychologie Bd. II, S.77.)
- ⑧ 『経験的立場からの心理学』の第一巻が出版された1874年当時、いまだ明確に強調されていないようであったが、ブレンターノの現象学的な記述的心理学の理論と方法はのちに発生的心理学とも明瞭に区別される。ブレンターノによれば、内的知覚によって直に把握される心理現象の学としての心理学は、心的な出来事の発生法則を因果的に説明する発生的心理学でもない。「生理学的事実を基盤とすることでのみ心理現象の継起の本来の根本法則へと進んでゆける」(Psychologie Bd.I, S.91-92)と述べられるように、以前の心理現象と以後の心理現象の因果関係や心理現象の継起の法則を研究する発生的心理学は、生理学と密接に関連したものと見なされる。(Psychologie Bd.I, S.67.) この点、フッサールにおける発生的現象学が生理学的(身体的)なものを表立って一切捨象しているのと対照的である。なお、1888/89年の講義録によれば、記述的心理学が発生的心理学の基礎を成すものと明言されている。(Vgl.Deskriptive Psychologie, S.131.)
- ⑨ こうした近世哲学の伝統とは対照的に、アリストテレス哲学はひどく自然主義的である。彼は心理的活動を、一部は身体の中枢器官に結び付いた可死的なものとし、他の部分はそれに結びつかず(それゆえ非物質的)で不死なるものとしている。前者は動物にも妥当するが、後者は人間固有のものである。(後論のごとく、ブレンターノのまとめによれば、アリストテレスは他に二つの分類の仕方を示している。)このような哲学史的伝統に照らし合わせると、デカルトによるコギトの発見は、心身二元論と形而上学的な実体論(實在論)という枠内に位置づけられたため、純粹意識の領野にまでついに到達しえなかったという点で、超越論主義の系譜の完成形態である(とフッサールが自認する)現象学に至るまでには未だ遠い道程を残しているとはいえ、超越論的現象学成立のための不可欠な一歩を確かに踏み出したものと納得できる。
- ⑩ ブレンターノの理解によれば、アリストテレスは、「動物が切斷されることによって動物の心もいわば切斷されたことになる」と考えている(Psychologie Bd.I, S.236.)

⑪ プレンターノは四肢切断 Amputation についても言及している。現象学者メルロー・ポンティエ（1908-1961 年）の幻影肢の議論で広く知られるようになったが、四肢切断などの後も患者は、既になくなった手足の元あった空間に痛みなどの感覚を感じると言われている。（Psychologie Bd.I, S.123.）なお、フランスでは、この点について、デカルトも少し触れているが、とりわけマルブランシュ（1638-1715 年）は、アントワヌ・アルノとの論争中に、腕をなくした人が既になくなった腕のところに痛みを感じるの、その腕の観念がその人の精神を、神のうちの観知的延長（延長の観念）の個別化の根源としての、精神の側の諸感覚（苦痛等々）で、触発するからである、という趣旨のことを言っている。（Cf. O.C. VIII-IX p.960ff.）

⑫ 我々は例えば音を聞くとき、「音」という表象と「音を聞く作用」の表象という二つの表象を有するが、後者の心理現象は内的知覚により、前者の物理現象は外的知覚により把握されている。音を聞く作用を客観とする作用をさらにまた客観とする心理作用、というような「第三のもの」をここで認めると無限背進に陥るが、プレントナーはこれを認めない。音という第一次的客観には第一次的な心理作用が向かうが、この第一次的心理作用そのものは、第二次的客観として、第二次的な心理作用によって、ともに把握されている。しかし、後者の第二次的心理作用は、前者の第一次的心理作用と別ものではなく、それと合致しているため、遡行はこの第二段階で停止する、と考えられている。（Psychologie Bd.I, S.183.）これについて第一巻で、「ある心理活動についての内的知覚は、この心理活動とともに同一の実在的統一 reale Einheit に属している」と端的に述べられている。（Psychologie Bd.I, S.249.）

⑬ 不確かな物理現象についての外的知覚は本来の「知覚 Wahrnehmung」ではなく、心理現象を対象とする直接的で明証的な内的知覚こそが厳密な意味の「知覚」であると、プレントナーは考えている。（Psychologie Bd.I, S.129.）

⑭ フッサール現象学では、この「現実的実在性」という性格は、『イデー』や『論理学研究』などの用語法によれば、「実的 reell」という概念で特徴付けられるものに対応すると思われる。元来の用法における「実的」とは、「実在的 real」ないしは「現実的 wirklich」（あるいは「実在 Existenz」）などという概念に極めて近い概念であったのだが、フッサールがそれに特別な意味を付与したのだった。（Vgl. Husserliana Bd. III, Bd. XIX/1.）いわゆるエポケーの徹底化に伴って、実在的なものとしての世界はすべて括弧にくくられたので、括弧外の意識の「純粹（非実在的）」な性格を表すのに、「実在的」という概念を使えなくなったため、それに「実的」という語を充てたものと思われる。プレントナーのテキストでは、例えばライブニッツのモノダについて、「実在的 reell に異なる諸実体」と説明している箇所などに見いだされるように、「実的 reell」の元来の用法に従っている。（Psychologie Bd.I, S.233.）

Husserliana: *Edmund Husserl Gesammelte Werke*, hrsg. in Gemeinschaft mit dem Husserl-Archiv an der Universität Köln vom Husserl-Archiv Löwen unter Leistung von H.L. Van Breda und S. IJsseling, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1950ff. (Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London.) Bd. III. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Erster Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie, hrsg. von W. Biemel, 1950.

⑮ 哲学的に見れば、デカルトの「表現的実在性（表象的実在性）realitas objektiva」という概念が、この「志向的実在性 intentionale Existenz」と基本的には同じものを指していると思われる。それは「観念によって表象され、観念のうちにある限りでの事物の存在 entitas rei repraesentatae per ideam, quatenus est in idea」とされるものであり、「形相的実在性」と区別される。「形相的実在性」とはスコラ哲学に由来する術語であり、「その原因において、結果におけるのと同等の実在性が形成されてあるありかた」のことである。また、デカルトやスコラでは、「表現的」「形相的」に加えて、「優勝的」という概念がある。これは「その原因において、結果におけるよりもより優れた実在性が、その原因の優勝性からして形成されうるありかた」のことである（Cf. 『第二答弁』 A.T.VII, p.161.）デカルトは、この「表現的実在性」を観念論的に徹底させず実在論的に解釈する。この点については、『デカルト哲学の体系——自然学・形而上学・道徳論——』（小林道夫著、勁草書房 1995 年）の第三章・3 の記述が参考になる。

⑯ この点を考察すると明らかになるのだが、一口に「現象 Phänomen」つまり「現出 Erscheinung」と言っても実は曖昧なものであり、その両義性こそが、中期フッサールの『イデー』（1913 年）における有名な「ノエシス・ノエマ（志向的構成）」の理論へと発展してゆくことになる。『現象学の理念』（1907 年）というゲッチンゲンにおける講義録において、「現出」概念の両義性について論じられている。物理現象とは「構成されたもの」ないしは「ノエマ（志向的客観）」としての現出であり、心理現象とは「構成するもの」ないしは「ノエシス（志向作用）」としての現出である、ということになる。

Vgl. Husserliana: *Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Bd. II, *Die Idee der Phänomenologie - Fünf Vorlesungen*, hrsg. von W. Biemel, 1950, S11.

⑰ 前の章の引用箇所では、「志向的実在性 intentionale Existenz」と「現実的実在性 wirkliche Existenz」が対置されていた。そうすると、「志向的」と「現実的」が対立概念ということになり、「志向的」ということは「現実的でない（非現実的）nichtwirklich」という含意をもつことになる。この点、スコラ哲学の「志向性」やデカルトの実在論における「表現（表象）」概念と通じるものがあり、観念論的視点を徹底させた果てに、「志向的」客観と「現実的」客観とを等置することになるフッサール現象学とは異なる。

Vgl. Husserliana: *Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Bd. III, § 90.

- ⑱ 誤解を避けるために注記すれば、後者の存在論的な意味での「現実的実在性 wirkliche Realität」という概念は、ブレンターノ自身が使用している概念ではない。本章の引用で志向の対象がもっていないとされる実在性 Realität は、明らかに存在論的な意味で（心の外の物それ自体が有する客観的実在性として）使用されていると考えられる。先に挙げた『非実在的なものからの転向』における「実在的 real」という概念も、志向の対象がもたない、存在論的な意味の実在性 Realität を指しているのではないかと思われる。
- ⑲ ライプニッツ・ヴォルフ学派に属する啓蒙時代の哲学者（心理学者）ニコラウス・テーデンスこそ、意外なほど新しいことに思われるであろうが、今日我々がなじんでいる心理活動の三分法（知・情・意）の最初の確立者である。
- ⑳ 後年になって放棄する思想であるが、ブレンターノは、あらゆる形式の判断(定言的形式・仮言的形式・選言的形式)は、意味を変えずに、存在命題のかたちに表示うと考えている。定言的判断についてのみ説明すれば、「p は q である」という定言命題は、「q である p がある」という存在命題に変換しうる。そして、「p がある」という判断は、「p」という表象と「存在(ある)」という表象との結合ではなく、「p」という対象を真なるものとして肯定し、その存在を承認したものである。他方、「p はない」という判断は、「p」というものの存在を真ならざるものとして拒否することである。ブレンターノの見るところ、他の多くの哲学者と異なり、ジョン・ステュアート・ミルは、判断の働きとは特有のものであって、単なる表象に分解されず、また表象の結合によって構成もできないということ、不完全ながらも洞察していた。(Psychologie Bd. II, S.44,50,55-60,82,193.)
- ㉑ 意志と感情を同一の範疇に入れることは、哲学史上の豊かな伏線がある。アリストテレスは、欲求の対象は善または善きものとして現象すると考えているが、彼は「善い」ということと「欲求できる」ということを同一視し、欲求の中に快・不快の感情、そして表象的思考や判断的思考でないもの全て、を含めている。また、中世ではトマス・アクィスも、欲求は善なものとしての客観に関係するとしている。(Psychologie Bd. II, S.92,97.)
- ㉒ 『経験的立場からの心理学』の第二巻で、愛憎や意志は表象を前提することなくしては成り立ちえないと、ブレンターノは幾度も断言しているが、判断と愛憎の基づけ関係については、ブレンターノの論述は少し歯切れが悪い。例えば、あるものを愛する者は、あるものが存在すると信じることは必要ないとはいえ、愛するとはあるものが存在することを愛するというところから、判断する能力にかかわらず愛憎の能力を有するような者を考えるのは実際には不可能なようだ、ブレンターノは言っている。(Psychologie Bd. II, S.129.)
- ㉓ 『論理学研究』「第五研究」第六章の『「表象」および「内容」という術語の重要な多義性についての総括的研究』という箇所において、フッサールは十三個の異なる「表象」概念を区別している。
Vgl. Husserliana: *Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Bd. XIX/1, *Logische Untersuchungen*. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Erster Teil, hrsg. von U. Panzer, 1984, § 44-45.
- ㉔ 1913年の『イデー』第一巻出版時、ブレンターノは死の数年前の最晩年期にあっただけでなく、既に志向性の立場を離れて実在論に傾斜していたためか、この点についてフッサールを批判したということは知られていない。
- ㉕ Husserliana: *Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Bd. XIX/2, *Logische Untersuchungen*. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Zweiter Teil, hrsg. von U. Panzer, 1984, S. 544ff. Beilage: Äussere und innere Wahrnehmung-Physische und psychische Phänomene.
- ㉖ 前掲論文「内的知覚と外的知覚」では、ブレンターノにおける「物理現象」の両義性も明快に指摘されている。物理現象を単に、我々に見える「色」とか聴こえる「音」などと定義するだけでは、現出する(志向的)対象そのもの(後に「ノエマ」と呼ばれるもの)の徴表か、現出の作用(「ノエシス」と呼ばれるようになるもの)に実的 reell に内在する感覚与件のことか、依然、曖昧さが残るというわけである。(Vgl. Husserliana Bd. XIX/2, S.763ff.)
- ㉗ 『イデー』期以降になると徹底されるが、「純粹意識」とは「心 Seele」ではないと明言され、そのため「現象」「体験」「意識」「作用」などの概念から「心的 seelisch」「心理的 psychisch」という特徴づけが一切排除されるようになる。これらの概念が排除された理由は、超越論的エポケーにより超越的な実在世界(空間時間的世界)の定立は完全に停止されているが、心的(心理的)なものとはこの世界内に存在する「実在的」なものの一種であるためである。(前掲のブレンターノの遺稿『記述的心理学』の講義録では、「心理的実在 psychische Realitäten」という表現も見られる。)(Vgl. *Deskriptive Psychologie* S.129.)そして、フッサールの用語では、「実在的」なものとは空間的延長を含むものであるのに対し、純粹意識(現象)とは空間的延長を含まない「非実在的 irreal」な存在だからである。純粹現象学において、「内的知覚」とは、こうした「空間的延長を含まない純粹現象についての知覚」という新たな存在性格を帯びることになった。これに対し、ブレンターノの経験的心理学は、我々の心の外に空間的世界が実在しているという自然的信憑の内を依然として動いている(Psychologie Bd. I, S.151.)
- ㉘ エポケーという方法論を採用していないブレンターノは、心(身体と結びついた意識)の外に確固たる世界が広がっているという自然的信憑に無批判であるため、明らかな「実在論」的特徴を有していた。しかし、存在者を意識内の

志向的对象として見る志向性理論を内包していたという点で、「観念論」的傾向も同時に胚胎していたと言わねばならない。フッサール現象学とは、前者を廃して後者の観点のみを突き詰めたところに成立するものであり、志向的構成の理論によって（実在的な）存在者全てを「意味 Sinn」として捉える超越論的観念論である。

※本論文に対しては、芸術研究所運営委員会の委員の方から、有益な多くの御指摘を頂いた。最後に、記して感謝を表したいと思う。